

罪と福音

聖書では、神の福音を私たちが少しでも正確に理解できるよう、様々な視点から「罪」の説明をし、それを取り除く神の恵みである「福音」について述べている。ガラテヤの手紙のまとめとして、「罪と福音」という視点から見てみよう。

罪を探る

罪とは心を神に向けないことである。心を神に向けないとは、神の言葉である御言葉に心を向けないことを意味する。「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。」(ヨハネ 1:1)。御言葉に心を向けないとは、御言葉で平安を得ようとせず、見えるもので平安を得ようとすることを指す。つまり、御言葉を食べないことが「罪」である。では一体、何が御言葉をふさいでいるのだろうか。御言葉をふさぐものこそ、具現化された罪の姿である。

イエスは、御言葉をふさぐものが三つあると言われた。「いばらの中に落ちるとは、こういう人たちのことです。みことばを聞きはしたが、とかくしているうちに、この世の心づかひや、富や、快樂によってふさがれて、実が熟するまでにならないのです。」(ルカ 8:14)。つまり、御言葉を食べさせない罪は、「この世の心づかひ」、「富」、「快樂」を通して働いている。こうした御言葉をふさぐ思いを「肉の思い」、あるいは「肉の欲」という。では、「肉の欲」はどのようにして誕生したのだろうか。

「肉の欲」を誕生させたのは「律法」である。「律法」とは、私たちの心を拘束する、「ねばならない」という戒めであり、価値を見いだすための物差しである。例えば、どんな人が好きか尋ねると、色々な答えが返ってくる。女性からは、「優しい人」、「年収〇〇以上ある人」、「背が高くてハンサムな人」といった答えが返ってくる。男性からは、「美しい人」、「優しい人」、「家事ができる人」といった答えが返ってくる。こうした思いが、人の心を拘束する「律法」である。

人は、この「律法」の物差しで人の価値を計っている。そのため、自分の物差しに合致する人を見ると好きになる。そうすると、その相手を手に入れたいという「肉の欲」が発生する。相手に気に入られようと「この世の心づかひ」を頑張り、「富」を手に入れ相手を幸せにしようと頑張り、何としても相手と関係を持ちたいという「快樂」に走る。こうして、「律法」は、人の心を神に向けなくさせるための「肉の欲」を発生させる。また、自分の「律法」に合致しない人を見ると、相手に嫌悪感を覚えさせる。さらには、自分の「律法」で人と比べさせ、嫉妬したり、落ち込んだりさせ

る。このように、「律法」が様々な「肉の欲」を生み出し、「肉の行い」を引き起こしている。「私たちが肉にあったときは、律法による数々の罪の欲情が私たちのからだの中に働いていて、死のために実を結びました。」(ローマ 7:5)。では一体、何が人に「律法」を作らせたのだろうか。

そもそも、「律法」というのは、価値を見いだすために生まれた物差しである。そうした物差しを人が作って、自分の価値を見いだそうとするのは、自分には愛される価値がないという思いがあるからにほかならない。もしも、自分には価値があることを知っているなら、人は決して「律法」に頼って自分の価値を見いだそうとはしない。つまり、人に「律法」を作り出させたのは、自分には価値がないという思いである。では、どうして自分には価値がないと人は思うのだろうか。

それを理解するには、人とは何かを知る必要がある。人とは、次のように造られたという。「神である【主】は土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで人は生きものとなった。」(創世記 2:7)。「いのちの息」とは、神の「いのち」で造られた「魂」であり、その「魂」が人の「いのち」となった。それは、人は神との関わりの中で生きるように造られたことを意味する。つまり、神に愛され、神を愛するように造られたのが人である。こうした人の造りが理解できると、どのような状況になれば、人は自分には価値がないと思うようになるのかが分かる。それは、神との関わりを失うときである。人はその造りから、神との関わりを失う「死」を背負うと、どうしても自分は愛される価値を失ったと感じ「恐怖」を覚えてしまう。このように、神との関わりを壊す「死」が、愛される価値がないという「恐怖」を人にもたらすのである。

以上の内容をまとめると、心を神に向けさせない「罪」は、「死」がもたらした「恐怖」という「死のとげ」によって誕生し、その「罪の力」が「律法」を作らせた。そして、「律法」を使い「肉の欲」を誕生させ、人の心を神に向けなくさせている。

「死のとげは罪であり、罪の力は律法です。」(I コリント 15:56)

このように、罪のことを探ると、罪の原因は神があらかじめ人に備えられた「欲」でも、神が人に与えた自由意志でもないことが分かる。原因は「死」にある。では次に、こうした罪を取り除くために神が用意された「福音」について見てみよう。

御霊によって歩め

罪を取り除く神の「福音」とは、別の言い方をすると、「肉の欲」を引き起こさせる「律法」を取り除くために用意された「神の恵み」である。その恵みを、ガラテヤ書五章 16 節から 26 節までの御言葉を順番に見ていくことで学んでみたい。初めのガラテヤ 5:16 では、二つの異なる生き方が述べられている。そのことで、罪とは何かが明らかにされている。

「私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。」(ガラテヤ 5:16)

御霊によって歩みなさいとは、御霊に目を向けて生きることである。御霊に目を向けるとは、神の言葉に目を向けることであり、神の言葉を心の糧として生きることを意味する。それとは逆の生き方が罪である。つまり、神の言葉に心を向けないことが罪である。その罪の生き方を、ここでは「肉の欲望を満足させる」という言い方がされている。そして、御霊によって歩むなら、罪に生きることはなくなるという。そのわけが、この続きで述べられている。

「なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。」(ガラテヤ 5:17)

御霊によって歩むなら罪に生きることがなくなるのは、この二つの思いは互いに対立しているからだという。つまり、「肉の欲」は御霊の思いに逆らうので、御霊によって生きることさえできれば、もう「肉の欲」の下にはいないのである。そのことが、この御言葉の続きで述べられている。

「しかし、御霊によって導かれるなら、あなたがたは律法の下にはいません。」(ガラテヤ 5:18)

この御言葉で、特に注意して読んでほしいのは、あなたがたは「肉の欲」の下にはいませんとは言わず、「律法」の下にはいませんと述べている点である。つまり、「肉の欲」は「律法」が生み出すので、わざわざ「律法」という言い方がされている。このことから、罪とは「律法」であり、「律法」が「肉の欲」を生み出しているという理解に立っていることが分かる。

御言葉はさらに続き、自分が「律法」の下にいるのかどうかは、「肉の欲」が引き

起こす「肉の行い」があるかどうかで判断できることを教えている。

「肉の行いは明白であって、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、酩酊、遊興、そういった類のものです。前にもあらかじめ言ったように、私は今もあなたがたにあらかじめ言うておきます。こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません。」（ガラテヤ 5:19-21）

「肉の行い」には、どれも共通点がある。心が神の言葉に向けられていないということだ。見えるもので満足を得ようとしている点が、「肉の行い」には共通している。それゆえ、「肉の行い」があれば、御霊によって歩んでおらず、「律法」（肉の欲）の下にいることが分かる。こうした「肉の行い」が、「表の罪」である。

この御言葉で気をつけて読まなければならないのが、「こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません。」という箇所である。その意味は、神の国へは入れないという意味ではない。御霊によって歩まないで、「肉の行い」によって歩むなら、「御霊の実」は決してならないという意味である。そのことは、この続きで、御霊によって歩むなら、「御霊の実」がなると述べられていることから分かる。

「しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。このようなものを禁ずる律法はありません。」（ガラテヤ 5:22-23）

こうした「御霊の実」を一言で言うと、それは、神への信頼に伴う「平安」である。この「平安」を手にするのを、「安息」に入るといふ。つまり、先の「こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません。」（ガラテヤ 5:21）とは、「肉の行い」の中で生きる者は、「御霊の実」がならないので、「安息」には入れないという意味である。神の国へ行けないという意味ではない。

このように、「相続」という言葉は、救いにあずかることだけに使われる言葉ではない（ガラテヤ 3:18）。救いにあずかった者が神への信頼を増し加え、「安息」に入れることに対しても使われる（ガラテヤ 5:21）。

こうして、ガラテヤ書の一連の御言葉は、御霊によって生きることと、「律法」（肉の欲）によって生きることの違いを鮮明にし、いよいよ「神の福音」の話、すなわち「律法」を取り除き「肉の行い」をやめさせる話へと進んでいく。では、引き続きガラテヤ書の御言葉を読んでみよう。

十字架に死ぬ

「キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです。」(ガラテヤ 5:24)

御言葉は、私たちが救ってくれたキリストの十字架の贖いに言及している。その贖いは、ただ単に私たちが救い、神との関係を回復してくれただけの十字架ではなかった。十字架は、私たちの「肉の欲」を取り除くためのものでもあった。それゆえ、「自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです。」と述べられている。では、これは一体どういうことなのだろうか。

私たちの「肉の欲」は、「律法」から生まれた。「律法」は、価値を見いだすための物差しであり、自分には愛される価値がないという「恐れ」が作らせた。その「恐れ」は、「死」がもたらした。つまり、「肉の欲」という「律法」の下から解放されるには、「死」がもたらした「自分には愛される価値がない」という思いを払拭するしかない。言い方を換えると、「律法」の行いには関係なく、自分が愛されていることに気づくしかない。では、そのためにはどうすればよいのだろうか。

それは、私たちが救うために「いのち」さえ惜しまれなかった、キリストの十字架を知る以外に方法はないのである。キリストは十字架で、「律法」の行いには関係なく、私たちがどれだけ愛されているのか、どれだけ価値ある者なのかに気づかせてくださる。これを「全き愛」という。この「全き愛」だけが、「自分には愛される価値がない」という「恐れ」の思いを払拭してくれる。「愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。」(Iヨハネ 4:18)。「恐れ」が締め出されれば、それに伴い、自分の価値を求めるための「律法」は使われなくなっていく。すなわち、「肉の欲」が取り除かれていく。こうして、私たちが十字架の贖いの「全き愛」を知れば、「肉の欲」も取り除かれるのである。そのことが、「キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです。」(ガラテヤ 5:24) と述べられている。

このように、神が用意された十字架の福音は、私たちがどれだけ愛される価値があるかを知らしめることで、「律法」を無効とし、私たちの「肉の欲」を滅ぼしてしまうものである。この「全き愛」を知るには、自分がした「肉の行い」の罪を、神の前で言い表すことである。そうすれば、必ず十字架の「全き愛」が見え、罪が赦された

ことを知り、御霊によって生きることを目指すようになる。「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」(Iヨハネ1:9)。

こうして、私たちは自分が愛されていることに気づく。これを、「赦しの恵み」にあずかるという。また、「赦しの恵み」を通して、自分が愛されていることを知り、「律法」という眼鏡を外せるようになることを、「十字架に死ぬ」という。十字架に死ぬことができる、人は今後、「律法的眼鏡」という「人間的な標準」で、神も人も知ろうとはしなくなる。

「ですから、私たちは今後、人間的な標準で人を知ろうとはしません。かつては人間的な標準でキリストを知っていたとしても、今はもうそのような知り方はしません。」(IIコリント5:16)

これが、「律法」の下にいる私たちを「律法」から解放し、「肉の欲」を満足させる生き方に終止符を打つ「神の福音」である。ガラテヤ5:24には、そうした「神の福音」が述べられている。そして、さらにこの続きで、十字架の「全き愛」を知り、「肉の欲」を十字架につけたのだから、御霊によって生きるよう話が続く。では、ガラテヤ書の続きの御言葉を見てみよう。

自由を取り戻させる

「もし私たちが御霊によって生きるのなら、御霊に導かれて、進もうではありませんか。互いにいどみ合ったり、そねみ合ったりして、虚栄に走ることはないようにしましょう。」(ガラテヤ5:25-26)

御言葉は、十字架に死んで御霊によって生きるよう述べている。それは、互いにさばき合う生き方ではなく、愛し合う生き方だという。なぜそう教えるかという、十字架に死んで「律法」から解放されれば、人は神と人とを愛せるようになるからだ。というのも、神は人を、神を愛し、人を愛するように造られたからである。

ところが、その自由を「律法」が奪っていた。「律法」が、人に対して怒りを覚えさせ、人を愛せないようにさせていた。「律法は怒りを招くものであり、律法のないところには違反ありません。」(ローマ4:15)。その「律法」は、自分など愛される価値がないという思いから、愛されるための価値を見いだすために作られた。そのため、キリストは、愛されていないという思いを人の中から取り除くために十字架に掛かれ、愛していることを人に伝えられた。

「神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」(Iヨハネ 4:9-10)

この十字架の「全き愛」を知るなら、私たちは「律法」から解放される。神を愛し、人を愛せる「自由」を取り戻した中に入れる。そこに入ることを、自分の肉（律法）を十字架につけるといい、十字架で死ぬという。こうして、十字架の贖いは、私たちが「律法」から解放し、「自由」を取り戻させてくれる。これが、「神の福音」である。ガラテヤ書五章の冒頭では、この福音のことを次のように教えている。

「キリストは、自由を得させるために、私たちを解放してくださいました。ですから、あなたがたは、しっかり立って、またと奴隷のくびきを負わせられないようにしなさい。」(ガラテヤ 5:1)

奴隷のくびきとは、「律法」のことを指す。それは、人を愛せなくさせてしまう、人の価値を計る規定である。そこから解放し、人を愛せる「自由」を取り戻させてくれるのが「神の福音」である。そのことを、この御言葉は教えている。これが、罪という病気がいやされることの中身である。ガラテヤ書 5 章 16 節から 26 節まで順番に見てきたが、そこには何が「罪」であり、何が「神の福音」であるかが、このように見事に述べられている。

